

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

February 2021 vol.32



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「ファッション イン ジャパン 1945-2020-流行と社会」

日本発の洋服を創る ADセンター・ファッショングループの試み

企画展島根会場特別展示「コズミックワンダーと工藝ばんくす舎 ノノ かみと布の原郷」

時代を超えて交差するかみと布の静かな光

企画展「杉浦非水 時代をひらくデザイン」

グラフィックデザインのパイオニア、杉浦非水が歩いた石見

32



左:《イヴニングドレスとストール》 1977年秋冬 / 中:《赤いバラ柄のイヴニングドレスとロングガウン》 1970年代 / 右:《幾何学模様イヴニングドレス》 1970年代
デザインはいずれも森英恵

「ファッション イン ジャパン 1945-2020 ー流行と社会」

2021年3月20日(土・祝)～5月16日(日)

休館日:毎週火曜日(5月4日は開館) 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)



図1



図2



図3

図1. ADセンター・ファッショングループ
パンフレット「ファンキータッチ」
1960年 セツ・モードセミナー蔵

図2. 『ドレスメーカーキング』No.24 1954年 個人蔵

図3. ADセンター・ファッショングループ
パンフレット「AD.CENTER NEW LINE COLLECTION」
1960年頃 セツ・モードセミナー蔵

日本発の洋服を創る ADセンター・ファッショングループの試み

「ファッション イン ジャパン 1945-2020 ー流行と社会」(表紙)は、戦後日本のファッションと社会を、衣服だけでなく写真や映像、雑誌やポスターなど多くの資料によって紐解いていく展覧会である。展示品の中に、ADセンター・ファッショングループ(以下AFG)が発行したパンフレットが2点ある(図1)。ここでは、当時の服飾流行の現状に問題意識を持ち、ユニークな活動を行なったAFGの仕事について紹介したい。

AFGの母体は、ADセンターというデザイン会社である。1957年に設立され、社長にはスタイルブック^{※1}と雑誌を出版していた日本織物出版社の鳥居達也が就いた。のちに雑誌『アンアン』のアートディレクターとなるデザイナーの堀内誠一が社員となり、「セツ・モードセミナー」主宰の長沢節も顧問のようなかたちで関わったという^{※2}。AFGには、先に挙げたメンバーに加え、ADセンター専務の今井清、若手のデザイナー中村乃武夫、西田武男、平田暁夫らが参加した。

まずAFGが結成された当時の衣生活の状況について確認しよう。洋服が日常着として定着した戦後の日本では、洋裁がブームとなり、多くの女性が服を作って着た。製作の際に参照したのは流行の服とそ

の仕立て方が載った『装苑』や『ドレスメーカーキング』(図2)などの洋裁学校が出版する雑誌だった。こうした雑誌は、流行の発信地として大きな影響力をもったパリ・モードの中心的デザイナー、ディオールやパレンシアガらの最新の動向を盛んに取り上げた。なかでもディオールの扱いは別格で、衣服のシルエットをアルファベットの文字になぞらえた「Aライン」「Hライン」といった新作が紹介され、あわせてそれを真似たような服が多数掲載された。ラインという用語は、当時の新聞記事にも見出せることから一般にもある程度は知られていたと思われる。

ADセンターの鳥居は、こうしたパリ・モードに盲従する当時のファッション界の状況を見て、日本から新しい流行を創出しようとAFGを立ち上げたのだった。AFGの作成した資料に、「ADセンターは、現在日本に於ける唯一の『流行ライン発表機関』」とあり、「新ライン」発表までのフローがまとめられている(図3)。実際には、スタイル画家^{※3}としてファッション業界と関わりが深かった長沢が、若いデザイナーたちのアイデアをとりまとめた。AFGは1957年の「ハンターライン」を皮切りに「クラシックトーン」「ファンキータッチ」と、半年毎に新しいスタイルを打ち出した。これらは都度、ジャーナリストを招いた

ファッションショーで披露され、タイアップした講談社の雑誌『若い女性』でも紹介された。そのうち「ハンターライン」と「サイドライン」の二つは製品化され、デパートで販売されたという^{※4}。しかし、AFGの活動は、1960年を最後に中断してしまう。

AFGが活動した1950年代後半は、服を仕立てることが中心であり、流行を取り入れた既製服が店に並び、それを自由に選んで着るという現在では当たり前の状況は、まだ実現していなかった。戦後日本のファッションの動向を通覧する際、日本発の流行を既製服の分野でも創出しようとしたAFGの仕事は、頓挫したとはいえ、先駆的な試みのひとつとして注目してよいだろう。

※1 スタイルブックとは、服のかたちや着装スタイルについての写真やイラストを載せた雑誌などのこと。

※2 「AFGの年二回のショーを企画」『20世紀日本のファッション』源流社、1996年、254-256頁

※3 スタイル画とは、スタイルブックなどに載せる衣服のかたちを描いたイラストのこと。デザイナーの創出したイメージを、衣服を製作する側に伝えるデザイン画とは異なる。

※4 「AFG発足」前掲書、252頁

セツ・モードセミナー代表長澤秀棟、長澤善子様からADセンター・ファッショングループに関する資料一括をご提供いただいた上、ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

「コズミックワンダーと工芸ばんくす舎 ノノ かみと布の原郷」

2021年3月20日(土・祝)～5月16日(日)

休館日:毎週火曜日(5月4日は開館) 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

企画
展
場
特
別
展
示



A. 作者不詳《上講武の敷布》(部分)
藤 昭和初期 個人蔵 撮影:仲川あい
島根県松江市鹿島町の山間部、
上講武では藤織りの習俗が記録された

B. 隅田正三《大井谷の冬景色》
1971年 撮影:隅田正三
冬のあいだ紙を漉き、紙布を作っていた
島根県浜田市の間部、金城の大井谷

時代を超えて交差するかみと布の静かな光

「ノノ かみと布の原郷」展(以下、ノノ展)は、「ファッション イン ジャパン 1945-2020」展(以下、ファッション展)に合わせ、ファッション展とは対照的な視点から、衣服を通して日本の豊かさや日本人の精神性を捉えようとする企画だ。日本の様々な地域に残された「自然布」や、布になる前の糸、糸作りに使う道具や織機、そして九州に特徴的に多く見られる布の跡が残る土器などを展示し、生活圏内に生えている草木を材料に、着るものも一から自分たちの手で生み出していた時代の、日本人の衣生活をさぐる。「自然布」の代表的な素材としては、藤、葛、梶、椿、大麻、苧麻、樺、芭蕉、オヒョウなどがある。これらはそれぞれ生育に適した環境が異なり、素材としての特徴も異なる。

例えば芭蕉は沖縄に特徴的な植物で、葉鞘^{よじ}から取れる繊維を糸として用いる。庶民は自宅の庭に植えて育て、衣服の材料としていた。一方オヒョウは北海道に特徴的な植物で、幹の径が1mもの大木ともなる。アイヌは山に自生するオヒョウに祈りを捧げたのち、全体の4分の1ほどの面積となる表皮を剥ぎ取って糸とした。芭蕉は糸を作ろうとするときに倒すが、オヒョウは枯れないように表皮の一部だけをとる。このように「自然布」はそれぞれの土地に住まう人々の文化と一

体となり、採取の時期から、方法、糸を取り布にする工程、用途まで様々だ。布を通して、各地の風土や人の営みが見えてくることに改めて驚きと面白さを感じたが、その多くは今日ほとんど残っていない。お金を出せば好きな服が手に入る現在の暮らしと、糸から手作りせねばならないこうした布とは、時間とお金が全く合わないからだろう。島根でも、かつては藤布が出雲地方を中心に、紙布が石見地方を中心に、作られ、着られていた。松江市鹿島町や島根町に残された藤の作例は、漁網や蒸籠に入れる敷布、山作業の際に着る作業着などで、いずれも水弾きが良く繊維が頑丈であるという藤の特徴をいかしたものだ。そして浜田市金城で収集されている紙布の肌着や作業着、布団生地などには、かつて津和野藩の飛び地であり椿和紙を年貢として納めていたこの地域に特徴的な人々の暮らしが映る。安価で便利なプラスチック製品の普及や車で移動するような暮らしへと遷り変わる中で、いずれも徐々に姿を消した。

布から日本各地の面白さや豊かさを見つめる視点を与えてくれたのは、今回展覧会に招聘するアーティスト、コズミックワンダーと工芸ばんくす舎である。前田征紀を主宰に衣服や書籍、映像、パフォーマンスなど

様々な方法で作品を発表してきたコズミックワンダーは、近年久留米緋、丹波布、葛布など日本に古くから伝わる布を用いた作品を発表してきた。この前田と、工芸デザイナーの石井すみ子の出会いにより生まれた美術ユニット、工芸ばんくす舎(2015年～)は、そこに手漉き和紙という要素を加え、布と紙の原初に向かう研究を独自の感性で続けている。

展覧会では、前田と石井が筆者とともに丁寧にリサーチを重ねて選び抜いた自然布や暮らしの道具(先述のとおり)に加え、コズミックワンダーと工芸ばんくす舎が手がける新作も併せて展示する。新作には藤や梶など「自然布」と同じ原料で新たに製作した手漉き紙を用いたものや、リサーチの際に撮り下ろした写真や映像が含まれる。古の人々の暮らしや精神性を尊重する前田と石井の心が、自然布が作られ使われていた土地を歩き、共鳴した先に見せる表現はどんな姿だろうか。時代を超えて交差するかみと布の静かな光を、是非展示室でご覧いただきたい。

※鞘のように茎を包んだ葉の基部のこと。
イネ科やセリ科などに見られる。

「杉浦非水 時代をひらくデザイン」

2021年7月3日(土)～8月30日(月)

休館日:毎週火曜日 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)

グラフィックデザインのパイオニア、
杉浦非水が歩いた石見

杉浦非水(1876-1965)は、三越呉服店(のち三越百貨店)の看板デザイナーとして活躍するなど(図1)、明治時代末から昭和時代中期にかけて日本のグラフィックデザインを牽引した人物だ。彼はデザイナーとして華々しい業績を築く前の一時期、島根県石見地方の浜田で教員として暮らしていた。本稿では残された画帖(スケッチブック)から、彼の石見生活の一端を紹介したい。

非水(本名、朝武)は愛媛県松山市の出身。東京美術学校で日本画を学ぶ一方、洋画の教授であった黒田清輝がフランスから持ち帰ったアールヌーヴォー様式のポスターに魅せられ、デザインの勉強を始めた。

美術学校卒業後、大阪でデザインの仕事をしていた非水だが、勤めていた印刷所の廃止後、再び上京する。職を探す非水に島根県第二中学校(現在の島根県立浜田高等学校)教諭の席を紹介したのが、同校出身で、非水とは美術学校の同期生だった島根県美郷町出身の日本画家、中原芳煙だった。

明治37年(1904)4月、28歳の非水は結婚したばかりの妻とともに島根県浜田市に赴任した。この時期の様子がかがえる資料として、3冊の画帖が遺されている。このうち表紙に「明治三十七年八月より十一月五日迄 山陰道の濱田」と記された1冊から、非水が117年前に見た景色を追ってみよう。

この画帖には日付と場所が記されたものが比較的多く含まれている。中でも「天長節」(明治天皇の誕生日である11月3日)と記されたスケッチが最も多い。

「天長節」の記載があるのは、浜田市街の北7キロにあり現在は漁港となっている「唐鐘」にはじまり、「波子」、「都野津」(図2)、そして「江津」へと続く。当時の石見には鉄道がまだ来ていない。非水はこの日、海岸沿いを東に約20キロ歩き、昭和中期まで江津の中心地として栄えた江津本町まで遠征したようだ。

「江津ノ神社」(図3)に描かれているのは山邊神社の鳥居(図4)。横から見た「奉寄進」が非水のスケッチからもかろうじて読み

取れる。奥に描かれた建物は隣接する西曉寺と思われるが、現在はその前に別の建物があり寺の屋根は見通せない。

11月3日には「千本桜」の芝居も観た(図5)。続いて大勢の人でにぎわう「開橋式の日 橋詰の曲芸」(図6)、さらに「江津の朝飯 五日」(図7)といった絵が現れる。島根時代の画帖の中でも、この3日間のスケッチはとりわけ数が多い。天長節と開橋式でにぎわう江津を見物するため、学生たちと出かけた2泊3日の小旅行をめぐって楽しんだことが伝わってくる。

非水は1905年(明治38)11月に中学教諭の職を辞して上京した。彼の石見生活はわずか1年半に終わったが、日本海の雄大な光景は、彼の心に深く刻まれたことだろう。企画展ではこの他にもこの時期に非水が投稿した写生が掲載された雑誌なども紹介する。デザイナーとして活躍する前夜、石見で写生の腕を培った日々があったことを、この機に知っていただきたい。

(川西由里 当館専門学芸員)



図1



図2



図3



図4



図5



図6



図7

図1. 《三越呉服店 春の新柄陳列会》ポスター
1914年 愛媛県美術館蔵

図2, 3, 5, 6, 7. 《画帖(島根時代)》より
1904年 愛媛県美術館蔵